

第 99 話〈野菜売り〉の要約と参考資料

第 99 話〈野菜売り〉の要約

岩戸鉦山の最盛期、土呂久の人口は 800 人にのぼりました。建ち並んだ鉦山社宅の一角では、東京からきた幹部がテニスを楽しむ。その隣に、白装束の老女が祈祷をするお大師堂が建っている。住民が 65 人に減った過疎の現状から、とても想像できない光景でした。

第 99 話〈野菜売り〉の参考資料

99-1 鉦山最盛期の人口

昭和 10 年 10 月 1 日現在土呂久居住人口（高千穂町保存土呂久行政資料より）

	世帯数	男	女	計
鉦山を除く	68	210	186	396
鉦山	74	234	124	358
計	142	444	310	754

佐藤ミキさんの話（1979 年 4 月 18 日聴取）

岩戸から畑中まで来ると、それまで電灯がいったのに、土呂久に入ると、鉦山で明るくて、電灯がいらなかった。

大崎袈裟蔵さんの話（聴取日不明）

坑内は 3 交代で入りよった。全盛時代はライトがついとった。歩くのにライトはいらなかった。

佐藤正四さんの話（1978 年 12 月 12 日聴取）

助さんが鉦山に売った土地に、鉦山はだいたい学校をつくるといいよった。しかし、つくらざったですね。

99-2 土呂久鉦山の社宅

大崎袈裟蔵さんの話（聴取日不明）

松尾のころ（昭和 8 年ごろ）社宅を建てた。材料はほとんど黒木正喜が官山をつぶして出した。モミとかツガを。共同風呂は木造で、男女別。いっぺんに 20 人～30 人はいるくらいの広さ。いまコンクリで残っているのは配水タンク。その下に共同風呂があった。屋

根はルーフィングとトタン。

松尾から中島になるので大工がはいった。大工としての職員が6人、袈裟蔵、小笠原磐城（いわみ）、佐藤進、佐藤常義、佐藤久、佐藤貢など。仕事は社宅の修理、亜ヒ酸箱づくり。鉦員がどこから何人来るといって、社宅も建てた。熊本、大分、県内、いろいろのところから来た。全盛時代は500～600人働いた。

所長の官舎はホテルみたいなもの。酌婦もおる。窓には彫刻して（大工が彫る）、風呂もある。玄関はいるとじゅうたんを敷き詰めて、表には桜の木。所長、次長、課長などお偉方の家が2棟あって、ぐるりに桜を植えて、家の構造が全然ちがう。瓦をつこうであった。平人夫の社宅はバラックですからね。ルーフィングかトタン。

佐藤アヤ子さんの話（1979年4月13日聴取）

わたしが合宿所に行っていたころ、篠田所長。それから神崎さん、松尾さん。そのあと萩原所長。このときは佐藤シズ子さんが炊事婦に出た。

職員寮（独身寮）と合宿（鉦員独身寮）は、それぞれに食堂がある。寮の食堂は広がった。夜、畳の敷いてある部屋が柔道場になった。ふつうの畳だと破れるので、柔道用にさした畳が敷いてあった。土地がないから、寮は2階のごとして、下から上につっぱりがしてあった。寮には7～8人はいっていた。群馬県から来ていた。職員住宅だけ風呂があった。男風呂と女風呂に分かれていた。職員寮にもあったが、合宿にはない。10人くらいは入れる共同風呂は無料。風呂焚きは会社が雇っていた。

99-3 職員寮の賄い

佐藤アヤ子さんの話（1978年聴取）

「臨時でいいから炊事婦に来てくれ」と言われて、岩戸尋常小学校高等科を1年でやめて、昭和9年の中ごろから職員寮の炊事婦になった。職員寮は1棟、大きいのがあった。事務所の独身の人ばかり20～30人入っていた。鉦夫の寮とは別。炊事婦は3人いた。田崎トクさんと甲斐ハツエさん（浅部の人）と私。朝5時に起きて、7時頃ごはんを炊き始める。薪を拾いに行った。枯れ木に亜ヒ酸がかかっていた。箱をくずして、竈でたいた。昼ご飯は11時前に炊いて、弁当に詰めて事務所に持って行った。食べてしまったあと、空をもって帰る。夜は3時半ごろから準備して、4時半に風呂をわかし、5時に食べられるようにした。

99-4 野菜売り

佐藤カジさんの話（1978年聴取）

村の人が自分とこに余ったとき売り歩いた。岩戸からも来る。矢野さんが魚を持って

くる。野菜なんかを持ってきよったです。

佐藤ミキさんの話（1977年1月8日聴取）

ほんの細い道があるだけで、6軒長屋とか8軒長屋とか、仲治さんの家までずっと長屋ばかり。私とかアヤさんとか、年中野菜売りに行きよった。朝行って3円かた売ってくりゃえらいがな。立宿とか上村からも、タケノコをカルイにかろうて来よらした。

佐藤ミキさんの話（1977年5月15日聴取）

昭和10年ごろ、白菜とかカンランとか、まだはやらなかった。野菜が商品になったのはずっとあと。庭先で自家消費をつくるくらい。鉾山に売りに行ったのは、タケノコとか高菜。野菜畑をつくっておる者はおらん。

佐藤アヤさんの話（1979年3月4日聴取）

おクラさん、ハナエさん、迫のマチヨさんたちと、大きなカルイいっぱいひのせてから、上に「しめの」という縄かけて、一寸ずりようよう登った。3日に1回の割合で野菜売りに行った。白菜、大根葉、トーガラシ、ナスビ、キュウリ、土の中ででくるジャガイモ、ラッキョ、サトイモ、カライモ、野菜畑に自分とこの分だけでなく、売る分も植えよった。

どこが誰とは決まっていなかった。1間1間入っていくと、「アヤさんな、顔が売れとるから、よう売れるわ」と言われた。合宿へんでも売りよった。朝と夕行くこともある。ハナエさんと2人、暗くなっただけ、山野栄ちゅう男からカンテラ1つ借りて、ハナさんが「番所さ、いぬれば、人間の生き肝とりに殺さるるけ、あっちさいぬらず、向土呂久の前を通ろう」と言って、一二三さんとこ下さ、2人でいんだこともある。

川原一之著「口伝 亜ヒ焼き谷」P142-144

野菜では、いちばん弱かったのが豆類。大豆はいっぺん煙が這（ほ）うたら、葉もなにも縮んでしめて花が咲かん。ふつうは1本に50も60もさやがつくものじゃが、土呂久の大豆は10寸ばかりになると葉がチリチリになって、さやがついたとしても1本に2、3個だけ。アヤさんな高等小学校で三田井へ遠足に行く途中、浅部（あさかべ）部落の畦道に小豆がえらい太っちょるのを見て、珍しゅう思うことじゃった。どげん不作でん部落の衆は「今年こそでくるじゃろ」ち思うて、根気強く畑作を続けた。どうしてか理由は不明だが、ナスは弱くてとんと収穫でけんが、キュウリは強い。トウキビや土の中で育つ大根、ニンジン、イモ類も強いことがわかってきた。土呂久の畑はだんだんと、煙に強い作物に切替えられた。

中島が「かな山」と「樋の口」から買い上げた土地に、やがて社宅が建ち並んだ。土呂久川の左岸に所長住宅、職員住宅、職頭長屋、合宿所、それに従業員の長屋。右岸にも5棟、6棟と長屋が建って、従業員の数は100人、200人とふくれあがった。もともと人口

200人余りの小部落が、いっきよに倍になっての。土呂久小学校新設の話がもちあがるほどじゃった。こうなると、ふえた人間の食糧をどげするかが問題になる。野菜が必要なときは、長屋の住人は近くの農家で分けちもろた。部落ん衆は余ったのを渡しちよったが、そのうち野菜が現金収入になるとわかった。自家用にしか作ったことのねえ野菜が商品になった。毎朝、長屋の中を野菜売りが回る。近くの部落からも商売(あきない)に来る。6軒長屋とか8軒長屋が細い道をはさんで並ぶ一帯で、「母屋」のハナエさんやミキさん、「中間」のアヤさんなど学校出たばかりの娘が、大きいカルイに入れた野菜を売り歩いた。3円も売ると、農家にとってえらいな収入じゃった。(略) そんな年(昭和10年)の11月25日の和合会では、「野菜ノ売行き非常ニ多イタメ、今後充分作り方ヲ研究シ、薄利多売式ニスルヲ良シトス」という相談までしたものよ。

豆腐の売れ行きもよかったの。「小又」のおタカばあやんにイセノさん、「富高屋」のカジさん、砂太郎さんと別れたシオさんたちが豆腐をつくった。忙しい日は午前2時から起きて、石臼をひいた。肉や魚がなかなか手に入らん山奥じゃき、豆腐は飛ぶように売れた。野菜は売って歩いたが、豆腐は向こうから買いにも来た。大豆は土呂久でとれんから、岩戸の店で大量に仕入れた。鉱山が大きゅうなって、部落は活気づいた。

99-5 拌み屋

陳内フヂミさんの話(1979年1月18日聴取)

金子キクという人。岩戸の金子床屋が元家。おキクばあさんち言いよった。鶴江さんが住んでいたところにいた。お大師さんがまつてあつた。わたしゃ、4、5人の鉱山の女の人といっしょに御詠歌を習いよった。リンタ(鈴)をまだ、持つとるよ。おキクばあさんは何回も何回も四国参りさしたとよ。願かけに行ったんじゃないか。おキクばあさんは小笠原いわみさんの奥さんのおつかさん。それで、いわみさんたちといっしょに住んでいた。

大崎春恵さんの話(1979年4月13日聴取)

1か月に何回来ますから、と言って願をたてる(かける)んですよ。そしてから、お参りに行くとです。私がお参りすれば、拌み屋さんがお経をあげてくれる。「1週間に1回参りますから、袈裟蔵が無事に帰りますように」と願をたてる。1週間にいつでもいいから1度お参りする。わしゃ、きつかったが、袈裟蔵さんのお父さん(十太郎)が、そうせえというんで、いやとはいえんから……。地下足袋はいて、土呂久まで登りよった。1日かかり。娘(ミヤギ)のどこに泊まって帰ったり。木造のお大師さまが家をかっしておられた。繁盛していた。行けば、お米を持っていったり、手ぶらじゃいけません。いわみさんは鉱山にでよらした。3月21日はお大師さんの祭り。縁日。鉱山からも人が出て、お参りする。病気をみてもらえば、どげじゃ、こげじゃ言いよりましたけ、拌む人にはわかる

んでしょうね。1週間に1回を3年つづけたですもんね。袈裟蔵は前線に出たそうです。北支とかいうところで、ずっと行っとたですけ。終戦になっても、いつか帰ってきませんわ。お父さん、袈裟蔵が帰ってくる前に、亡くなったけど。

佐藤実雄さんの話（1979年4月15日聴取）

鶴江がどこに向って右手に、お大師堂がつくってあった。広さは8畳くらい。畳が敷いてある。高いところに、お大師さんにやら、他の仏像が何体かあって。お大師さんは今、「鶴」の横にあるじゃろ、「長石」の入口のところに。これが、お大師さん。腰かけてよ。いろいろみてもらう。「こどもが病気するが、なにかの障りがあらせんやろか。ちょいとうかごうてみちくれんの」。こんときは、ふつうのかっこうの金子キクさんじゃ。大きなばあさんじゃった。四国八十八カ所を回るとよ。そうすると、支度を変える。手をあろうて白い装束を着て、遍路が笠をかぶらんだけのかっこうよ。じゅずをガサガサいわせながら、お経を唱える。お大師さんが乗り移るとよ、身体ががたがたになって、人相が変わりよったけよ。本当におずしてよ。「水神とか火の神とかの障りがある」。いろいろ言うわの。3月21日はにぎわいよった。お接待やらだして、小豆ごはんをおにぎりにして…、お賽銭箱があって賽銭をあげよった。病人がつづく、死人が続くときはよ、やっぱり……。金子キクの娘婿の小笠原いわみの本名は磐城（いわき）。しかし、相撲取りのしこ名みたいに「いわみ」と言いよった。